

烏森トレッキング回想記

第二回

日時：'98. 6. 6 (土) ~ 6. 7 (日)

概略行程：

- 1日目 御岳駅～ケーブル下滝本～長尾平～七代の滝～天狗岩～ロック・ガーデン～綾
広の滝～芥場峠^{あくぼ}～本岩展望台^{もといわ}～大岳山荘展望台～大岳山 (1, 266.5m 日
本二百名山) ～長尾平～ 宿泊／登奈利荘
- 2日目 日の出山 (902m) ～養沢小屋～上養沢バス停～武蔵五日市駅～東秋留駅～
秋川ファーマーズ～東秋留駅

メンバー：米本、山田、吉川、大谷、磯崎

二回目のトレッキングは、新緑の奥多摩行。

当初は、武蔵五日市側から大岳山稜／馬頭刈尾根^{まづかり}に取り付き、その後、尾根伝いに歩いて、「大岳山」に登攀し、御岳へ下ると云う一般ルート計画であった。

しかし、計画時の高ぶりから冷静さを取り戻すにつれ、まさにトレッキングの神髄とも言える、メンバーの深い歩きを思い出し、直前に予定を変更、待ち合わせ地を、前回同様、「御岳駅」に変更連絡する。

今回も天候に恵まれず、雨中の歩き。

登りのベース、「長尾平」で身支度を整え、前回立ち寄りを見送った「七代の滝」へと直降下。

なかなかの急坂で、膝への負担を気にするが、“折角の、上りの貯金を無駄使いしおって…”、と別の悩みで頭が一杯か、メンバーが気にする風無しは幸いなり。

途中、上養沢バス停からの登山道に出会う辺りから、沢音の響きが近くなり、道は上りに反転、岩場の道を少し歩くと、間無く、飛沫が滝壺を打つ「七代の滝」に到着。

「七代の滝」は、七段、七釜の捻れ滝。

岩を滑り落ちる流れは雨も手伝い水量豊か、規模、勢い共に、「綾広の滝」を圧倒する。流れを遡ればロック・ガーデンから。

岩に腰掛け、しばし休息後、左手に滝流を見ながら、前回休止の「天狗岩」を目指し、急な鉄梯子の連続を登り返す。

見上げるメンバーの合羽姿が余りにたくましく、後ろ姿を記録しようとファインダーを覗くと、脚が…、脚の上がり、何故かスローモーション！

眼の錯覚かと思わず瞬きするも…。

前回同様、「天狗岩」の大岩下で小休止。言わずもなが、祠見上げる人は無し。

前回の反省から、今回のガーデン歩きは上りに取る。

深山の奥沢、“沢登り”と云うには、道が整備され、水量も乏しいが、名前通りの岩場続きの道で、溪谷覆う樹々は春の息吹きに満ち溢れ、雨に洗われた枝葉の緑が眼に爽やか。

途中の、休憩所木テーブルに荷を降ろし、小休止。

首にタオルを巻き、岩石足場に清流で洗顔すると、眼前、葉陰越しの苔むす岩に、のそりのそりと歩みを進める、「でんでん虫」を見つけて、つい目を細める。

「綾広の滝」を最後にガーデン巡りを終え、「水場」に回る。

毎回立ち寄り、汗を流して喉を潤す嬉しい「水場」。水量豊かも、流れる先が、あの「綾広の滝」とは、未だ合点がいかず。

次に向かうは、日本二百名山にて奥多摩三山の一つ、「大岳山」。

奥多摩登山ガイドでは必ず紹介される人気の山で、“瘤”のような頂き山容に特徴を有し、その急峻振りは知る人ぞ知る。

取り付き直ぐの急坂は、何とも歩き辛い、小石だらけのジグザグ路。その後も、単調で無愛想なだらだら坂が続き、休むに適切な場所がない「試練の道」。積雪時には、アイゼン（鉄爪）装着の要否を案内する立て札が立つ。

それでもメンバーは、顔を真っ赤に黙々と歩を進め、愚痴もこぼさず任意（勝手）に休み、最初の目標地点、「芥場峠」に無事到着。

ここまで来たなら折角と、晴れた日、周囲360度のパノラマが広がる「本岩展望台」へと片道15分の寄り道をするが、煙る雨に視界は無く、残念無念と悔しがる。（行く前から解ったじゃないか？ いやいや、山の天気は変わり易いと云いますから、はい！）

されど、立ったままで寒さに震えながら食事するメンバーの姿は、まさに、「岳人」の風なり。

峠に戻り、再度、「大岳山」へ。

メンバーは次第に寡黙となり、足取りが、若干、気怠る気に見えるのは緊張感によるものか、それとも不満の…。

悪天候と云うこともあり、さすがに登る人は少なく、時折、孫連れの老夫婦や、女性教師に引率された小学生集団が先を急ぐが（抜いて行くが）、彼らの顔にも一切笑みはなし。

それでも、鎖場、鉄梯子なんのその、自棄のやんばち火事場の馬鹿力、一気に山頂足下、「大岳山荘展望台」に辿り着く…フーッ！

眼前には、当初、縦走を計画した新緑の「馬頭刈尾根」^{まづかり}が連なる筈も、降りしきる雨に薄墨のシルエットのみは、**残念無念と安堵する。(いやはや、何と申しましょうか…複雑な心境が、つい、こう云う表現になってしまっていて、はい！)**

周りに他パーティの人影は無く、メンバーは沈思黙考、中に眠り出す人も居り、若干気懸り。

しばらく休息した後、最後の急登に立ち上がる。

頂上間近に岩場が連続する難所があるが、“**何だ坂、こんだ坂、これしきごとき何のその、勢い付いたら止まらぬぞ**”、と約20分の登攀で、無事山頂に立つ。

残念ながら、無人の山頂は、ガスで視界無し。

それでも、いつの間にかメンバーの顔に笑みも戻り一安心。

後から来た短パン姿の外国人2名を、「鋸山^{のこぎり} (1, 109m)」、奥多摩駅方面に見送り、下山に掛かる。(鋸山コースは、下りでも3時間内外を要すハードなコースで、1週間の筋肉痛を保証する)

(以下はスキップするが如く読む)

“後は宴が待つばかり、駅で、「澤ノ井」買うたぞな、今宵の酒は旨いぞな！”

【余談5】「日本百名山」は、作家深田久弥氏が選んだ日本の山100座である。

必ずしも標高にこだわるものでなく、歴史、姿、品格等を含めた総合的な判断による選択と云われ、1,000mにも満たない茨城／筑波山(876m)、鹿児島／開聞岳(922m)等も名を連ねている。(c f. 我等がホームグランド御岳山／929m)

その後の乱開発により、現在では、その名に値しないのではとされる山も多く、以前、「文芸春秋」で、数座の入れ替えが議論されていた。(‘00. 7月号 誌上座談会「新・日本百名山を選ぶ」)

いずれも山頂近くにケーブル・カー、ハイ・ウェイが敷設されて容易に登れる山が多く、理由が那边にあるかが窺えるが、無論、入れ替えされるものでもない。

タブーなるか、一番に議論されると思った、ゴミに埋もれた“偉大なる通俗な山(深田久弥)”は俎上に乗せられていなかったが、「世界自然遺産」に指定されなかった意味は、重々肝に銘じたい。

なお、「日本三百名山」は、その後、「日本山岳会」が選んだもので、「日本二百名山」は、更に後、「深田久弥クラブ」が選んだものである。

近時、百名山踏破を目指す人が多い。目標立てが、元気、継続の源と云うならそれも良からうが、トレッキングを楽しむに、さほど意味があるとは思えない。

また最近、朝日新聞が岩崎元郎氏選定による、「日本・新百名山」を、同紙水曜夕刊、週間朝日に連載しているが、広告欄で扱うべき内容構成ではと少々辟易している。

宿は、前回同様、「登奈利荘」。料理、酒共、・々満足。

翌日は、天候に回復の兆しが見られない中、予定通り、「日の出山」の山越えに向かい、雨中を出発。

通り道の宿坊入り口木札が、“この先、日の出山を經由し、八王子、横浜、アメリカ国に至る”、と豪快、楽しく道案内をする。

尾根道は起伏が少なく、進路右手の山斜面は杉の林、左手は広葉樹の雑木林と好対照をなし、まずまず爽やかなるも、所々で樹の根や岩が出っ張り、**たたらを踏んだり躓いたり**と中高年の弱さを丸出し、**大岩に腰掛けて、“冷や汗”を拭く。**

最後の急階段を登ると道が分かれ、左手正面には、「東雲山荘」、右手の石段を登ると「日の出山」山頂。辺りは一変、広葉樹に包まれ、雨に濡れた新緑が輝きを増す。

山荘の案内と、濡れた体を拭くため、小屋に入り一休み。煙草や缶ジュースも取り揃えられ、買い求めるメンバーも有り。

最後の石段を登り、「日の出山」山頂に到着。展望良とガイドされるも、霧雨がくすぶり視界は得られず。

しばらく佇んだ後、早々の下山を決め、昼前のバスに間に合えばと木階段を急降下するが、途中早くに断念、到底無理と諦める。

中腹の「養沢小屋」に寄り、雨宿り。登山中の人々と挨拶を交わし、水場で痛飲。これが旨いのなんの、“**たまらん!**”

(養沢鍾乳洞に続き、‘04. 1 現在、小屋は閉鎖され、水場も撤去済み)

山麓、「御岳林道」に出合う頃は雨も上がり、長くて、固さが脚に厳しい舗装路を、「上養沢バス停」へと歩く。

「養沢」は、数軒の家並みが集まる小さな山里で、JR武蔵五日市駅とはバスで結ばれ、「上養沢バス停」は養沢方面の終着点。

次の・には、1時間余りの待ち時間があり、楽しい時空間とし、各自それぞれに過ごす。

ベンチ横を流れる養沢川は、新緑の枝葉に川面を隠すが、水を集めて瀬音を響かす。なにしろ上流を辿ればロック・ガーデンの流れなり。

【余談6】“水の流れ”

大岳山、鍋割山、奥の院（長尾平から西に見る三角錐の山）～ロック・ガーデン上端の水場～綾広の滝～ロック・ガーデン御岳沢～七代の滝～養沢川～北秋川～秋川～多摩川～東京湾

五日市線を途中、東秋留駅に下車し、「秋川ファーマーズ」でバーベキュー…の予定が、材料準備ができないため、サービス不可とのつれない返事。

“それは無いでしょう、ほれ、この通り、ガイド・ブックにも予約無しで可と書いて…、ダメなものはダメ？、そんな理不尽な…、それでは私の立場が…、皆さんこういう事情で…”

土産に新鮮野菜を求め、近くの蕎麦屋でビールに蕎麦、どこかで記憶する図。

【余談7】種々あるも、順調にレベル・アップし、この勢いなら奥多摩の山々踏破は、間無しと確信。

奥多摩の、そして東京都の最高峰、更には日本百名山の一峰、^{くもとりやま}「雲取山（2,017.7m）」登山もその・にはと、「雲取山荘」のランタン明かりを眼に浮かべる。

しかし我がメンバーは、慎重、謙虚。今回の「ファミリー・コース」踏破に驕ることなく、今一度原点に戻り、「初心者の山歩き入門」の復習に励みたいと、強引、強硬な申し入れがあり、今しばらくは初心者コースの復習、予習、また復習！